

国際機関進路指導ワークショップ開催



8月28日、全国の公衆衛生大学院の進路指導に関わる教官・職員20人とNCGMをオンラインで繋ぎ、国際機関進路指導ワークショップを開催しました。センターは国際機関勤務希望者に対してワークショップ開催や個別進路相談を通じて、きめ細やかな進路指導を行ってきました。しかし、潜在的なグローバルヘルス人材が学ぶ全国の公衆衛生大学院の教官・職員より、学生に対して直接進路指導のアドバイスをして頂ければ、より多くの学生が国際機関を志望し、グローバルヘルス人材の増加につながるのではないかとこの考えから、初めての試みとして実施しました。

当日は、中谷比呂樹 センター長、地引英理子 人材情報解析官、阪上品子 国連開発計画駐日代表事務所グローバルヘルス専門官、平井智子 世界銀行東京事務所上級対外関係担当官、松島悠史 外務省総合外交政策局国際機関人事センター課長補佐より、それぞれ「国際保健の世界的潮流」、「国際保健関連機関の種類と活動」、「国際機関職員の契約と種類」、「国際機関の採用プロセス」、「ファースト・ステップとしてのインターン/JPO制度」について講演しました。

これらの講演内容は、将来国際機関で働きたい学生にとって必要な基礎的内容を網羅したものとなっています。オンラインでご参加された公衆衛生大学院の先生方には、ぜひ本ワークショップの内容を活用して頂き、より多くの学生に、国際機関勤務を将来の選択肢の1つとして勧めて頂きたいと思っております。

2020年度第2回 アドバイザリー・グループ会議開催

2020年度第2回のアドバイザリー・グループ会議が9月15日バーチャルで開催されました。年度当初予定した活動は、新型コロナウイルスの蔓延状況からバーチャルに切りかえて開催あるいは準備中であることが報告されました。また、毎年センターが厚労省のご支援を得て実施している邦人職員数調査結果の報告がありました。2019年度の邦人幹部職員等は52名で前年より8名増加していますが、それは我が国の専門委員会委員にあたる規範設定専門家への就任者増によるものであり、幹部職員の送り込みについては厳しい状況が続いている旨の報告がありました。次いで、センター開設以来3年が経過したので、今までの活動と成果を踏まえて、次の3年の活動目標と活動をどうするかが論じられました。特に、幹部職員を送り出すためには、人材登録者に希望ポストを通知しワークショップや個別相談を行うという従前の活動に加えて、より積極的な働きかけに取り組む必要性が指摘されました。センターでは、厚労省とも相談しながら、次の3年の活動計画を作ることとしています。

職員の雇用条件の比較一覧表

新型コロナウイルスパンデミックは、国際機関の雇用にも影響を与えています。2019年度後半の公募状況を前半と比べてみると、WHOとUNICEFといった雇用者数の多い機関の正規職員の公募は40%減少していますが、コンサルタントの公募数は落ち込んではいないものの正規職員ほどではありません。しかし、給与以外に、健康保険、年金、契約ブレイク（強制雇止め期間）など処遇に大きな差があるので、雇用形態をよく見て、オファーされる条件を念頭に、そのポストに応募されることをお勧めします。

	Fixed Term Appointment (FTA)	Temporary Appointment (TA)	Consultant	UNV
任期	通常1-2年	1年以内	ポストに 拠る	ポストに 拠る
基本給	○	○	○	△ (生活費の 考え方)
調整手当	○	○	×	×
国連健康保険	○	○	×	○
国連年金	○	○	×	×
各種手当	○	○ (FTAより条件 が悪い)	×	△
産休・育休	○	○ (FTAより条件 が悪い)	×	○
免税	○	○	×	○
契約ブレイク	×	△ (場合に拠り、 ある)	○	×
地域ローテ	○	×	×	×

今後の活動予定

センターでは以下の活動を予定しています。詳細はHPでお知らせしますので、バーチャルな会場でお目にかかれる機会を楽しみにしています。

日程	活動
11月 7日、14日、21日、28日	大阪大学グローバルヘルスコース
5日	
12月 6日	Go UN ワークショップ
12-13日	Global Health Diplomacy Workshop

人材登録のお願い

10月現在、582名の方が人材登録・検索システムに登録されており、ご希望に応じた空席情報がマッチング・メールにて届くようになっています。人材登録・検索システムの使い方に関する動画も登録ページに掲載しています。未登録の方は登録されますようお願いいたします。
<https://hrc-gh-system.ncgm.go.jp/>



グローバルヘルス・ロールモデル・シリーズの掲載

国際保健分野でのキャリアを考える際ネックになることが、ロールモデルになるような人物が身近にいなかったことでキャリアパスを具体的にイメージできないということをよく聞きます。そこで当センターでは世界の様々な地域で、また、グローバルヘルスの多彩な方面で活躍する日本人の方々のご帰国された際に熟練したインタビュアーにお願いして、キャリア形成のプロセスをお尋ねし、センターのホームページ上に公開させていただくこととしました。

第4回は、世界銀行本部 栄養専門官の岡村恭子氏と、りんくう総合医療センター 国際診療科 部長の南谷かおり氏です。

インタビュアー 清水真理子

第4回



世界銀行本部 栄養専門官

岡村 恭子 [おかむら きょうこ]

1972年大阪生まれ。同志社大学法学部政治学科卒業。米国アマースト大学国際関係学 学士号取得。ジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生大学院国際保健学 修士課程修了。2001年より国連児童基金 (UNICEF) ネパール事務所、東京事務所、エチオピア事務所に勤務。2014年よりグローバルリンクマネジメント株式会社に所属。2018年12月より現職。

私は日本のごく普通の中流家庭に育ち4人兄弟でにぎやかに過ごしていました。12歳の時、父の転勤でイランへ、革命後のイラン・イラク戦争の渦中にあり、物資は切符制で母は苦労したかもしれませんが、突然、庭にプールのある家、運転手付きベンツ、メイドがいて、という生活がはじまりました。車で下町を通った時に見たすすけた顔をした子どもたち、靴もぼろぼろ、車に近寄って物乞いをする。メイドから聞いた「息子が戦争に行って心配、皆が革命を望みただけで、生活はよくなる。革命前に始まった地下鉄工事は止まったまま。」子ども心に感じた「貧富の差って何？」という疑問が、ずっと心の奥にくすぶり続けました。



りんくう総合医療センター 国際診療科

部長 南谷 かおり [みなみたにかおり]

1965年大阪生まれ。1987年ブラジル国エスピリト・サント連邦(国立)大学(Universidade Federal do Espirito Santo) [UFES] 医学部卒業。1988年ブラジル国医師免許取得。1988年大阪大学医学部研究生(老年病医学教室)。1989年ブラジル国エスピリト・サント州 Santa Casa 病院救急科研修医。

1990年ブラジル国リオ・デ・ジャネイロ市国家公務員連邦病院(Hospital Federal dos Servidores do Estado)[HFSE]放射線科研修医。1992年大阪大学放射線医学教室研究生。1996年日本医師免許取得。1996年市立泉佐野病院放射線科研修医 国立大阪病院(現国立病院機構大阪医療センター)市立貝塚病院を経て、2004年りんくう総合医療センター市立泉佐野病院放射線科。2006年りんくう総合医療センター健康管理センター兼国際外来担当医。2012年～地方独立行政法人りんくう総合医療センター 国際診療科 部長。2013年大阪大学医学部附属病院 国際医療センター 副センター長。2013年大阪大学大学院医学系研究科 国際・未来医療学講座 特任准教授。2019年～大阪大学大学院医学系研究科 公衆衛生学教室 招へい教授。

私は大阪で生まれ、エンジニアの父の転勤で11歳小6から15年間ブラジルで育ちました。ポルトガル語が全く話せなかったため2年遅れの小4に編入。現地校はひとつの校舎を小学校と中学校が半日ずつ使うので授業は半日制。日本人補習校(小

大学では政治学を専攻、援助政策、対外援助について学んでいました。学内で偶然「国際公務員になろう」というピラを手に入れ、国際機関で発展途上国の開発に携われることを知りました。かっこいい！そのピラを大切に手元におき、国連英検を受け、準備を進め、新島スカラシップ(アメリカのアマースト大学の三年生に正規学生として転入学できる)に応募、合格しました。これには後日談があって、私が選ばれたわけは「雑草のようにしぶとそうだったから。優秀な人はたくさんいるけれど、全米ナンバーワンのリベラルアーツの学校で生き延びるには失敗してもめげない強さが必要。」その意味は入学後思い知るようになります。

英語のハンディもあり、文化的差異を経験し、そこでサバイブするには雑草のようにしぶとく生き延びることと思い知りました。私の関心は「食と栄養と貧困」に絞られてきて、UNICEFのNY本部栄養担当職員に面会を申し込んだり、そのほかにもさまざまな人に会って話を聞きました。アメリカには栄養士や医療者とは違った視点で公衆衛生について学べる公衆衛生大学院があり、ジョンズ・ホプキンス大学を訪ねました。(続きは https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role_model/ でお読みいただけます。)

規模の日本人学校)も半日制だったので両方通うことになりました。勉強は大変でしたが、日本人補習校の中3修了時にはある程度ポルトガル語ができるようになっていたので、両親が「そのまま7年生ではなく、高校に入学できないか」と現地校の先生に相談に行ったところ、高1には空席がなく、年齢では現地校の高2に相当するからといきなり飛び級入学しました。その高校は3年生が予備校になっており、1年生の内容はまとめて後で勉強できるからということでした。

ブラジルの大学入試は統一試験の総合点を用いて、各学科の定員に達するまで成績順で希望の学科に進学できます。医学部は最難関でしたが、英語は日本人補習校で基礎をしっかりとやっていたので読解力はつきましたし、公文式のおかげで計算が早かった。そして、面白いことに国語(ポルトガル語)の文法の点数は平均的なブラジル人より高かった。日本語を不自由なく話す日本人でも動詞の活用を間違えていたり、現代国語の点数が取れなかったりする人がいるでしょう。私は外国人なのでポルトガル語の文法を一から正しく学びましたから試験で点数を稼げました。(続きは https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role_model/ でお読みいただけます。)